

## 空中の権をもつ君，サタン

——『パラダイス・ロースト』の超自然——

室 田 五 郎

イギリスにおける17世紀の詩人ミルトンは、聖書にもとづいて叙事詩を書いたことはよく知られている。叙事詩とは、ヨーロッパにおいて伝統的な詩の形であって、ミルトンもその古い伝統に従って、ギリシャ、ローマの詩人よりももっとすぐれた詩を英語で歌おうとしたのである。しかも当時としては、ヨーロッパの他言語に比べれば貧弱であった英語で、キリスト教の教典である聖書の内容を歌おうとしたのであるから、その野心は相当なものであった。ミルトンが聖書のメッセージを正しく伝えようとして、聖書を細かく研究したことは言うまでもない。

彼は3つの大きな叙事詩を書いた。『パラダイス・ロースト』、『パラダイス・リゲインド』、及び『サムソン・アゴニーステス』である。これらはみな宗教的に深いテーマをもつ詩であるが、前二者は、キリスト教そのものに関わる。今回、私はとくに『パラダイス・ロースト』に登場するサタンに焦点をあてたい。

よく知られているように、キリスト教の聖典とされるものは、旧約聖書と新約聖書である。サタンはこの2つの聖書に登場するのである。旧約聖書の初めは、創世記である。創世記は神が天地万物を造りたもうたことを記している。もちろん神は万物を創造したのであるから、天使も人間も造りたもうたのである。

しかし神に逆らって天から追放された天使が、悪魔と呼ばれるようになったのである。神と悪魔は対立する存在であることがしばしば話題になるが、これは誤解をうみやすい点を含むので、注意を要する。

第一に神と悪魔は同じレベルの対立者ではないこと。第二に神が悪魔の如き悪そのものを創造したのではないこと。まして悪魔が永遠の昔に存在したのではないこと。

神のみが全能であり、神のみが創造者である。悪魔は、神の天使であった。しかし天使が神に逆らって天で戦いを起こし、地獄におとされたのである。さてこの悪魔が創世記のエデン物語にへびとなって登場し、エバをだまして禁断の木の実を食べさせて、神に罪を犯させた話は有名である。

『パラダイス・ロスト』の物語はこのエデン物語を中心に描かれているのである。このエデン物語は、単なる昔の古い物語ではなく、人類の今日につながるとミルトンが確信して提示するテーマを持つのである。

そればかりか、そこにはキリスト教神学がくりかえし立ち返らなければならない重要なメッセージを含んでいるのである。即ち『パラダイス・ロスト』は創世記にもとづく、人類の「パラダイス喪失」の物語である。新約聖書ローマ書には次のような言葉がある。

「ひとりの人（＝アダム）によって罪がこの世に入りまた罪によって死が入ってきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいりこんだのである」（ローマ 5：12）

すなわち、アダムとエバが神の禁制を正しく守ったならば、罪を犯さずにすみ、罪によって死の罰をうけずにすんだはずなのである。そしてこの物語は、神の摂理に深く関わることを明らかにするのである。

この詩の中で、ミルトンは、悪魔サタンがなぜ人を誘惑したのか、神はなぜ禁断の実の木（善と悪を知る実の木）をアダムとエバに禁じたのか、サタンとは何物なのか、などを論じていくのである。

ミルトンは『パラダイス・ロスト』の冒頭において、次のように歌う。

人のはじめの不従順につき、又かの禁制の  
木の実につき（歌え）、その致死の味は  
世界に死とわれらすべての苦をきたらせり  
楽園を失わせて。

(PL I 1-4)

そしてさらに詩人は言う、

誰がまず彼らをあの悪しき反逆に誘いしか  
地獄のへびぞ、彼、その奸計こそ

妬みと復讐にかき立てられ、騙せり

人類の母をば、

(PL I 33-6)

このようにこの詩の中で人間を襲った超自然の悪魔サタンの存在が重要なことがわかる。

『パラダイス・ロスト』は全部で12巻あり、キリスト教のあらゆる問題、あらゆるテーマが含まれているが、誤解と偏見によってであろうか、サタンが現われる最初の2巻がもっとも有名であり、よく読まれることも事実である。

## 1. サタンは不滅であり、自由意志を持つ霊的な存在である

すでにのべたように、サタンは神によって造られた大天使である。天使は霊的な存在である。しかしこの詩の中では、あたかも見える形があるように描かれている。天使は天において、本来神に仕える霊である。天使は無数に存在し、様々な階級に分かれている。

サタンは天にいたときには、光り輝く大天使であった。それゆえに、はじめルシファー（明星）という名で呼ばれていたが(PL VII 131-3)、神に逆らって、地獄におちてからは、サタンと呼ばれるようになったと言われる。サタンという名は「敵対するもの」(PL X 386-7)という意味である。

天使は肉体を持たない不滅の霊である。人のように死ぬことがない。また天使は自由意志を持っている。いいかえれば、神が天使を自由意志をもち、不滅の霊の存在に造ったのである。サタンは天使であるから、そのような存在であることは言うまでもない。だからサタンはその自由意志によって、神に反抗することができたのである。

神が全能の神であるならば、どうして天使に反抗され、戦いを挑まれたのかと不思議に思われるかもしれない。しかし、このことは神の創造の原則に関わる大問題であると、ミルトンは考えた。

## 2. サタンは、神の善を悪に変えるひねものである

神は天使に自由意志を与え、神に自由意志で服従するように造ったの

である。それが神の祝福を意味した。だが、その自由意志は、本当に自由であるならば、神に反逆することも自由である。サタンの強みがあるとすれば、反逆しても不滅でありうることに、霊的存在であるために、その意志、憎悪、勇氣こそは、何物にも、神によっても、絶対に束縛を受けないということである。

神の祝福は本物であった。神は全く善意の神だからである。サタンは神の善意を裏切ったのであり、悪用しようとしたのであると言ってもいいであろう。だが神はこの祝福の原則を変えなかった。なぜなら、神は真実であり、自己に矛盾することはできないからである。それゆえに一層サタンは神を裏切ることができた。

神はいくら裏切られても、自ら後悔するはずも、創造の原則を撤回するはずもなかった。神こそが正しいので不動である。だが何と逆説的なことに、そのような神がサタンより弱く見えるのはどうしたことであろうか。サタンが強そうに見えるのはどうしたことであろうか。

自由意志こそは、ミルトンが神の創造における祝福に満ちた原則であることを熱心に主張する著しい点である。神は人にも自由意志を与えたと彼は主張する。人は天使と同じような祝福の原則の中で創造されたのだと彼はいう。

彼は『パラダイス・ロースト』の中で天使ラファエルに、アダムに対して次のように語らせる。

われ自身も、他のすべての天使らも立ちて  
玉座の神の御顔を拝す。われらの幸い  
汝の幸いと同じく、服従と共に成る。  
他の保証何もなし。自由にわれら仕えるは  
われら自由に愛するゆえ、われらの意志に  
愛するか否かが存し、そこに立つか倒れる。  
さればある者倒れ、不服従に落ちたり。  
天から最深の地獄に落ちたり、ああ墜落は  
何たる祝福の高き座から、何たる悲しみに！ (PL V 535-43)

すなわち、天使は自由意志をもって、神に自由に仕えることができるように造られた存在なのである。そしてそこに天使の幸いがある（強制さ

れて仕えることは本当の服従にはならない PL Ⅲ 103-11)。

人間の場合も天使の場合と同じである。もし天使が自由意志を悪用して神に反抗するならば、天使としての祝福を自ら拒むことになって、天に存在を許されなくなる。それは自己疎外であって、自業自得である (PL Ⅲ 97-102)。

そこにおいて獲得する苦しみは自ら責任を負うべきものであって、神の責任ではない。神に何か責任があるとすれば、神の祝福に満ちた創造の原則こそ責任を負うべきものだということになる (PL Ⅳ 69-75)。

ミルトンは地獄を空間的に描きつつも、真の地獄がサタン自身の中にあることを強調する。彼はサタンに次のように独白させる。

遂に高ぶりと、更に悪しき野心故落ちたり  
天のうえなき王との戦いにて。  
ああ何故。神謂れなくかかる仕打うけたり  
われから。彼はわれを造りしに非ずや、  
かつての輝く位に包みて。又善に満ちて  
誰をも咎めず。彼に仕えるは難からざりき。  
何にもまして易しきかな。彼を讃えるは。  
いと易き恩返し。更に彼に謝意を示すは  
当然。されど彼の善が全てわれに悪となり  
害のみもたらせり。かくも高く挙げられ  
われ服従を不当と拒み、もう一步高ければ  
最高座に昇るならんと思ひ、また忽ち終わら  
せんと思えり、無限の感謝の莫大な負債を  
常に払い、常に負うは甚だ面倒なりとて。  
われが彼から常に受けしものをわすれ  
しかも知らざりき、感謝の心は  
負えども負わず、されど常に払い、同時に  
負いつつ、返済すると。されば何が重荷か。 (PL Ⅳ 40-57)

されば〔神〕の愛に呪いあれ、愛も憎悪も  
われには同じにして、永遠の災いなり。  
否汝に呪いあれ。それ彼の意に敵し、心が

自ら自由に選びしに、まさしく今嘆くゆえ。

われこそ哀れ。何処にのがれんか

無限の怒りと無限の絶望を。

何処に逃れようと地獄。われ自身が地獄。 (PL IV 69-75)

サタンはこのように、神の祝福と愛を呪う異質な存在に変質してしまった。そして神に復讐を決意するのである。

いかなる善もわれらのわざとならず

常に悪をなすこそ我らの唯一の喜び、

そは彼の高意に逆らうことなれば、

我ら抗う者ゆえ、もし彼の摂理

我らの悪から善を引き出すことを求めば

我らの働きその目的をくつがえし

善から常に悪の手段見出すこととなるべし。

そは時に成功し、かくて、おそらくは、

彼を悲しません、狙い違わずば又妨げん

彼の意中の意をも、所期の目的狂わせて。 (PL I 159-168)

サタンは神の善を悪に変えようとする。それがサタンの本質となったのである。ところが神の善はサタンの悪を善に変えることを意図する。このようにサタンは自由に神に対する反逆行為をくり返し、それを積み重ねるが、その結果は悪しき実を結んで、自らをさいなみ、かつ呪う結果にしかない。

神はサタンの跳梁を許しているが、それは神の創造の善が悪になったことにならない。むしろそれは神の善が一層不動であることを証明する。

さればそこから

立つことも台頭も叶わざりしならん、もし

万物を支配する天の意志と高い許しが

彼を自由におのが暗き謀に任せざりしなら。

その結果、罪のくり返しが、彼をして

自らの上に呪いを招くに至る。彼は求めて

他に悪を計るが、憤怒して知るに至らん、  
即ち、彼の悪計がもたらすものは只、人に  
無限の善、恵み、あわれみが示されるを、  
人は彼により罪におちたれど。彼には  
三巴に、破滅、怒り、復讐注がれたり。 (PL I 210-20)

神と悪魔サタンは全く相容れない異質な存在として対立することがここに示されている。善と悪が全く妥協の余地のない反対価値であることが、ここに劇的に描かれているといつてよい。神がサタンの謀る悪を善に変えること及び、神の善が悪に勝つことは(神がすでに預言するところであるが、cf. PL III 227-65, PL I 4-5, PL VII 429-31) サタンの悪を一層かきたてて、激化させるのに役立つのである。

しかし、そのことが結果として、人を苦しめることになるが、神は御子を通して人に無限の善を示し、そのことが人をサタンの悪から救い出すことになり、サタンは一層追いつめられることになるのである。異質なものとなったサタンには、もはや神に悔い改めることが不可能である。不滅なる霊であるがゆえにである。ミルトンは嘆く。

天なる霊にかかるひねくれが住むか？  
高ぶるものを説得する何の徴しがあるか？  
又何の不思議が頑固者を悔い改めに動かすか？ (PL VI 788-90)

### 3. サタンはその罪ゆえに不快な存在になった

『パラダイス・ロースト』はアダムとエバが、サタンにそそのかされて神の禁制を犯したために樂園を喪失する物語である。すでにのべたように、この物語の前提は、見える世界をこえた、宇宙的な巨大な、恐ろしげな、見えざる超自然の力のリアリティが樂園に侵入して起こったことである。

聖書は人がサタンの力に支配されているといい、人は罪と死に支配されていると語る(ヘブル2:1-5, cf. PL I 1-3)。それは不自然な、不快なことであり、醜く奇怪なことなのであると『パラダイス・ロースト』の中でミルトンは強調するのである。

この詩の第2巻はサタンにまつわるミステリーを読者に明かすのである。サタンが地獄を脱出するために、地獄の門の所に来て、「罪」と「死」に出会う。この二者は地獄の門番をしている。ここで読者は「罪」と「死」は、罪と死のアレゴリーであることが容易に分かるであろう。

このアレゴリーはサタンの身内としての強烈な個性を持つ存在である。サタンが罪を犯したことは神にくむところであり、神自身が、その罪のしるしをサタンに生ぜしめたのが「罪」であり、その「罪」をして、サタンを地獄に閉じこめる門守りたらしめたのであり、それゆえに「罪」が、サタンの脱出を阻止する力となっている、というようにミルトンの意図を読むことができるであろう。

「罪」は、サタンが天において御子に妬みをいだいて罪を犯したときに、サタンの頭から生れた (PL II 747-60) のであり、「死」はサタンと「罪」の相姦により、「罪」から生れたのである (PL II 767-8)。サタンはそのことを忘れていた。だから「罪」がそのことをサタンに思いおこさせるまでは、この出合いは鬼気迫るものであった。

しかし「死」がサタンを父と呼び「罪」と「死」がサタンの身内であることを急いで明かすことで陰悪な対決は終わった (PL II 747-814)。その後サタンは地獄の門を通過して、アダムとエバの住む世界へと冒険の旅に出ることができた。

「罪」と「死」の二者は恐ろしく醜悪な存在である (PL II 648-80)。だからサタンは、はじめ不快感をあからさまに示して言う。

汝呪わしき者いずこより来るか、何者か

醜く不快なるに、なお厚かましくも

汝の奇怪な面を突き出しわが道をはばむか

彼処の門に至る道を、

(PL II 681-4)

サタンは近ごろ新しく造られたと噂に聞く人間の住む世界に行くところであり、いずれそこに「罪」と「死」を連れていくと約束して、「罪」に地獄の門を開けさせるのである。このようにサタンは「罪」と「死」を敵の立場から、味方の立場へ変質させ、しかも、やがて神に復讐する自分の企てに加わらせるのである。

「罪」と「死」は、本来神の命令で地獄の門番をしていたが、一度禁



開の門の扉を開けてしまっただけからは、本来の役目を失ってしまった。なぜなら、「罪」も「死」も、サタンの言葉に利益を期待するものとなったからである (PL X 365-71)。即ち、「罪」と「死」は地獄の門守りの役目を捨てて、サタンの冒険の成功を願うものとなる。

さてサタンが人間の誘惑に成功したとき、その二者は地獄の門の所でサタンの成功を特別な感応力で察知し、そろって地獄の門をとびだす。彼らはカオスの中に、宇宙までの橋路を架けて宇宙に到達する。そこで、彼らは地獄への凱旋の途にあるサタンに出合い、サタンと感激の対面をして、サタンの激励を受ける。

わが名代として汝らを送る。又汝らを  
全権に仕立てて地に置かん、比ぶる者なき  
力はわれより出ずる。汝らの結ぶ力の上に  
この新しき王国の、わが支配すべてが立つ、  
そはわが業この国を罪から死へ染め行く故。  
汝らの協力が成功せば、地獄のことがらは  
損失をおそろす要全くなし。行け、強かれ。 (PL X 403-9)

かくして「罪」と「死」はサタンの名代としてパラダイスに向かう。これでサタンに「連れて」いかれるまでもなく、彼らが積極的にサタンの足跡を追ったのである。これが「アダムによって、罪がこの世に入り」、また「罪によって死がはいってきた」という聖書のことば (ローマ 5:12) がドラマとなって描かれたものであることを読者は理解すべきであろう。

読者はこのドラマによって罪と死がサタンの力として人間を襲ったのであり、それ故に罪と死および、サタンが初めから不愉快な、謎めいた、不自然な、誰も和解できない、呪わしいものであることを感得するだろう。

このドラマにおいて「罪」と「死」が、パラダイスに侵入し、「死」がパラダイスに住む人を「毒に染ませ」(PL X 608)、「罪から死へ染め」(PL X 407)、かくして人を苦しめる (PL X 842-44)。ミルトンはこのように描いて、人の罪と死が、いかに忌まわしくおぞましいものであるかを、読者に訴えたかったのであろう。

この世は神を見失った上に、罪ゆえの罰としての死が何を意味するの

かすら不明になってしまった (PL XI 500-8)。その中では罪も死も人の目には当り前のものとして受け入れられて、決して異常なものとして見えてこない。しかし神の目から見れば不快であり、恥すべきことなのである (PL IX 6-13)。

4. サタンは自分の敗北の始まりを知り、絶望的に地上を暴れる

ミルトンは『パラダイス・ロスト』を叙事詩の伝統にしたがって、祈願の後に物語りの中心から始める。それは地獄の世界におとされたサタンの動きに焦点を当てている。叙事詩は伝統的に英雄の物語であるので、その読み方からするとサタンが英雄ということになってしまう。しかしミルトンがサタンを英雄として扱ったのでないことはミルトンの英雄論 (PL IX 25-47) で明らかである。

だが何と魅力的で、すばらしい英雄のようにサタンが描かれていることだろうか。ミルトンは意図的にサタンに英雄以上の存在感を与え、敢えて読者に混乱を与えようとしたのかもしれない。

この詩の最初から、サタンが悪の存在であることは明白である。ミルトンにとって悪の存在は、神の善に敗北する存在である。しかしだからといって、読者が悪の存在のサタンを醜く、卑小な存在と期待することは、悪の本質を見失うであろう。それを伝統的な英雄以上の存在感を与えたから、この詩が失敗作であろうと考えることは、ミルトンの意図を読み誤るものであろう。なぜならそこにこそミルトンの悪の本質に対する洞察があるからだ。

ミルトンにとって悪の存在は黙示録的な、宇宙的な巨大な霊の存在である。それは世界を惑わす巨大なへびなのである (黙示録 12:9)。それは光の天使に偽造することも出来る霊である (Ⅱコリント 11:14)。それゆえサタンが叙事詩の最初から読者を惑わせても不思議はないのである。この詩の中でサタンは余りにも英雄的で、いやそれ以上にすばらしいので、一般的な悪のイメージに当てはめることを躊躇させられるほどである。

しかしサタンの存在感に圧倒されて、神がそれをはるかに越える創造者であることを忘れてはいけないはずである。神は絶対者であり、全能

者であり、創造主である。被造物のサタンがどれほど壮大で、偉大で、輝かしくても比較にはならない。もともと読者は神の永遠も無限も想像することは不可能だから、サタンがどれほど巨大に英雄的に見えても、それは人の想像できる範囲内のことである。それがこの叙事詩を読むときの心構えとならなければならない。

だからサタンの神に対する反逆は、神の勝利とサタンの敗北に終わり、サタンは地獄に呻吟しているのである。だが負けたとは思いたがらず、むしろ「天の戦い」では、もう少しで神を脅かすこともありえたと、配下の霊たち（及び、読者）に思いこませるのである。

天の平原にて勝敗つかぬ戦いをなし、  
彼の王座をゆるがせり、破れしも何ぞ  
すべて破れしに非ず。不屈の意志あり  
復讐の追求心、不滅の憎悪  
絶対に譲らず従わぬ勇氣あり  
然れば、征服されぬもの他に何あらん

(PL I 104-9)

この大言壮語は「天の戦い」における敗北故の絶望から来ている。即ち神との決戦により自分の疎外された運命が定まり、それ故になりふり構わぬ復讐をしようとするのである。

サタンは、パラダイスに狼の如く、又は盗賊の如く、忍び込んだのである。初め鵜となり、獅子となり、虎となり、アダムとエバの会話を立ち聞きし、蝦蟇になり、エバの耳もとでうずくまって彼女に悪夢を見させていた。

しかし見回りの二人の天使と激論を交わしたが、天使の警備隊全員に警戒体制をとらせる。ガブリエルとサタンの大議論がおこるが、サタンが武力に訴えようとして、巨大な姿にそびえ立った。

恐怖に絶望的になったサタンはまさに一触即発の状態になったが、神が宇宙の大混乱をさけさせるために、天空に1つのしるしを示したので、抵抗することなく、その場から逃げ去った。そのために、天の戦いの二の舞いにならずに済んだのである。しかし天使の警戒をさけて、暗闇や夜をえらんで、再びパラダイスに戻ってきて、へびをえらんで、その体内に潜り込んだ。そうやってサタンはエバに正面から接近することがで

きたと、この詩は語る。

破壊的な悪意と怒りに燃えているサタンは、意味ありげにエバの前に行動して、注目を引き、出会いのあいさつをする。へびは、エバになぜ人間の言葉を喋ることができるのか理由を問われて、神が人間に禁じた木の実を食べたためと、まことしやかに答える。さらにへびは、ためらったエバに善悪を知る木の実には運命を乗り越える力があり、現にそれを自ら経験したと語って、その実をたべれば、神々のように、目が開くとだまして食べさせるのである。

サタンは神の祝福された世界に対する反逆者であり、敵対者であり、異質な存在に変質した天使であるが、まだ祝福の中にある人間にとっても当然異質な、恐るべき存在であった。

サタンが人と出会うときは、人の意表を突き、そしてその結果は、人にとってもはや取り返しのない悲劇となってしまった。それが『パラダイス・ロースト』の冒頭の言葉

人のはじめの不従順につき、又かの禁制の  
木の実につき（歌え）、それその致死の味は  
世界の死とわれらのすべての苦を来らせり（PL I 1-3）

があらわしている内容なのである。

ミルトンは「天の戦い」を神の御子とサタン軍の対決として描いている。そこにおいて対決は、力と力の対決であり、神の権威を一身に帯びた御子は、サタンとその配下の悪天使たちすべてを相手に絶対的な勝利をおさめ、天から彼らを地獄へ追いおとしたのである。それゆえ、その後のサタンは力での復讐は成功しないことを痛感して、人を「罪」と「死」をもって支配し、人を神から引きはなすことで、復讐の目的を果たしたのである。それが創世記のエデン物語の意味であると読者は理解することができる。

しかし神は御子を世界につかわし、人を罪と死の呪いから解放したと新約聖書は語る。そのことをミルトンは、御子が人を「罪」と「死」から解放し、サタンの支配を無効にしたと語るのである。これは即ち、御子が神の権威をもって、人の歴史に介入し、サタンの世界支配を転覆したことを意味する。

このようなサタン支配の転覆は、「罪」と「死」の支配に苦しむ人間に対する福音となったのである。これはサタンにとって二重の敗北であり、その決定的な最後の日がすでに見えているので、一層絶望的に世界の中で、あらゆる悪魔的な働きに荒れ狂っているのである（cf. 黙示録 12:12, 13:5-7）。

## 5. 自然と超自然

17世紀に考えられた自然というのは、多くの伝統的な考え方を含んでいたことはいまでもないが、神学的形而上的な色の濃いものがあつた。その頃の人は「自然の書」（神の被造世界）を読めば、神の配剤の力を理解できると考えていた（Herschel Baker, *The War of Truth*, Gloucester, Mass 1952 p. 15）。ミルトンは一貫して聖書的立場をとり、世界が創造主と調和することを自然と考えた。

ミルトンは神が無から（ex nihilo）創造したという考えをとらず、神自身から（ex Deo）創造したと主張する（cf. PL V 469-72）。それは、すべての起源は神にあるということと、神の創造したものはすべて善にして聖であるという主張に通じる（I テモテ 4:4）。そして自然には「汚れなき自然の健全な法則」（PL XI 523）があつたと、ミルトンは主張するのである。すべての被造物はこの法則の中に存在したので、天使も人間も健全であつた。

ミルトンの世界に超自然があるとしたら、神に祝福された自然から外れているもの、そしてその自然を脅かし、襲うものという存在であろう。そういうものとしてはサタンとその配下の天使たちということになるだろう。なぜならそれらは、神の創造の調和と秩序とは異質の存在となつて、神と対立し、神の被造物たる人間を襲うからである。

その結果、人間は「汚れなき自然の健全な法則」を失い、罪を犯しやすい性質を普遍的に持ち、そのことが「自然な」こととする存在となつたのである。そのことをパウロはローマ書の中で次のように証言している。

「わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲することは行わず、かえって自分の憎むことをしている

からである。……もし、欲しないことをしているとすれば、それをして  
しているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪  
である。そこで善をしようと欲しているわたしに、悪が入り込んで  
いるという法則があるのを見る」(ローマ 7:15-21)

このような姿が人間の当り前の姿となったのである。その姿は肉体の  
本能的な衝動を正しいとする。聖書はそれが霊的に死んだ状態であるこ  
とを訴えている。

「さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって死んでいた  
者であって、かつてはそれらの中で、この世の習わしに従い、空  
の権をもつ君 [=サタン]、すなわち、不従順の子らの中に今も働  
いている霊に従って、歩いていたのである。」(エペソ 2:1-2)

しかしサタンに騙され、神の恩寵からおち、死ぬべきものとなって、  
その悲劇により世界がサタンの支配下に屈して、神の初めの恩寵からは  
異質なものとなったために、神の代理者たる御子の登場は、当座におけ  
る神の側と人の側のはげしい出会いとなり、神の御子を殺すという事件  
となった。

それは人の世界が神に敵するものに変質していて、神からは何も、御  
子さえも受け入れなくなっていたからである。そのことをヨハネは次の  
ように書いている。

「すべての人を照らすまことの光があって、世にきた。彼は世にい  
た。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずに  
いた。彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼をうけいれな  
かった。」(ヨハネ 1:9-11)

そしてこのような事態は当然予想されたことであり、預言されていた  
ことであった。預言者イザヤは記している。

「彼は侮られて人に捨てられ、  
悲しみの人で、病を知っていた。」(イザヤ 53:3)

ペテロはそのことを次のように語る。

「このイエスが渡されたのは神の定めた計画と予知とによるのであるが、あなたがたは彼を不法の人々の手で十字架につけて殺した。神はこのイエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせたのである。イエスが死に支配されているはずはなかったからである。」

(使徒行伝 2:23-4)

しかしそれは神と人との和解のための預言された犠牲の儀式ともいえる (PL XII 404-19)。

異質な次元に立つ二者が出合うとき、衝突するか、その衝突を避けるためには、和解の儀式を必要とするであろう。神は人の罪を怒りたもう、なぜならその罪ゆえに人は神の恩寵からはずれてしまったからである (cf. ローマ 1:18)。人は神にとって不快な存在となったのである。

だが、神は人を滅ぼすことを望まず、和解を望むのである。神は人がこの罪と死の呪いから解放されて、もう一度、神と和解が可能であることを預言者を通して語り続けたのである。

本来ならば人が神に、この和解の犠牲を払うべきであるが、律法を守ることのできない人にはなしえないので、神の全き權威を帯びた御子自身が人の中に入ってこの犠牲を払って、逆説的に神の側から手を差し出すことが預言されていたのである。イザヤ53章にはこう記されている。

彼を砕くことは主のみ旨であり、(10)

↓

しかも彼は多くの人の罪を負い、  
とがある者のためにとりなしをした。(12)

そしてこの救いは、死に対する勝利としての、御子の復活と昇天によって保証される。しかし、御子の復活と昇天は、サタンにとっては「死」の無効化を意味し (PL XII 420-7)、サタンの支配の無効化を意味する (PL XII VII 427-35)。

御子の「神の国」運動は、この世に神の国が突入したことを意味するが、そのインパクトは、サタンの世界支配に対する神の側の攻撃と考え

られよう。御子は弟子たちに語った。

「わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た」(ルカ 10:18)

それゆえ福音のメッセージは、地上における罪に汚れた自然を、創造の初めの聖なる秩序の自然へと回復するための、人に対するメッセージであると同時に、秩序と調和をみだしてしまったサタンに対する神の勝利宣言なのである。

ミルトンは彼の叙事詩の中で、一貫して聖書的立場をとり、世界が創造主と調和することを自然と考えた (William Oram, *Nature, Poetry and Milton's Genii*, in *Milton and the Art of Sacred Song* (ed. by Max Patrick and H. Sundell), the U. of Wisconsin Press, 1979, p.63)。

聖書によれば、我々がいうところの自然は、神がつくったものであるというのが一貫した主張である。神が人に被造物としての自然を治めさせたと聖書に記されている。

その自然は神の恵みの豊かさに満ちている。このような豊かさは神の祝福を示す。神の恵みは溢れるばかりである。それが神の善意の表われなのである。聖書の物語を聖書の精神に沿って書こうとするミルトンにとって、本来善なる自然が、いかにすれば人にとって善となり、悪とならずにすむかという問題が常にあったに違いない。

さきにのべたように、創世記には、神が人に自然を治めようとしたことが記されている。それは人に神が無条件に与えた自然に対する支配権であるように見える。だが果してそうだろうか。

人はサタンの騙しによって、神に罪を犯した。そのとき神は、「地はあなたのために呪われ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る」(創世記 3:17) といわれた。「地はあなたのために呪われ」というのは、罪の結果人は呪われた自然に苦しめられるということと理解できる。自然は神の被造物であり、人に支配されるが、神から託され預かったものというのが聖書の精神であろう。

治めるということが無条件で祝福であったとは思えない。むしろ人と自然の関係は神に従うことを前提とした神の恵みであったとみるべきである。神は、創造した自然世界を、この恵みの中の祝福に置いたのであ



った。

ミルトンの叙事詩の中において、天使ルシファーがこの恵みの秩序から自ら離れ、神は創造した秩序の中に異質で不自然な「罪」が生じたことを認め、天の戦いの結果、神の権威を帯びた御子の圧倒的な勝利により、この天使とその配下の霊たちを地獄に封じこんだのである。

しかし敗北したこの天使は復讐の念に燃えて、人の住むこの世界に呪いを持ちこんだのである。かくしてこの世界は神の祝福を失った、喪失の世界であるが、人は今それ以外の世界を知らないので、それを自然のことと受け入れている世界である。